

発行

名古屋大学大学院 国際開発研究科

〒464-8601 名古屋市千種区不老町

tel/052-789-4953 fax/052-789-2666

http://www.gsid.nagoya-u.ac.jp

「HeforSheキャンペーンについて思うこと」

研究科長 伊東 早苗

先日、名古屋大学が国連ウィメン (UN Women) のHeforSheキャンペーンパイロット事業「Impact10x10x10」に「世界の10大学」として選出されました。このキャンペーンは、ジェンダー平等を実現するための運動に、男性の積極的な参加をよびかけるものです。世界の政府機関、高等教育機関、企業からそれぞれ10人のリーダー (10団体) が選定されることになっています。本件は5月7日の朝日新聞一面で、大きく報道されました。名古屋大学がこれまで男女共同参画を推進するための様々な環境整備を推進し、女性リーダー育成のための教育や研究上の支援をしてきたことが高く評価された結果です。

ジェンダー平等は、国際開発の世界においても中心的課題のひとつとして、過去50年の間に様々な議論と取組みがなされてきました。初期の頃は、途上国の女性たちの窮状を救うための福祉的なアプローチが主流で、貧しい女性たちを対象にした開発援助プログラムが数多く実施されました。こうした福祉的なアプローチは、その後、「開発と女性 (Women in Development: WID)」というアプローチにとって変わられ、女性がもつ政治的、法的、経済的、社会的権利を実現するために、女性を開発の過程に積極的に参加させようとする動きに移行していきました。

しかしながら、こうしたアプローチの弊害も報告されることとなりました。途上国農村で女性の収入向上を促進した結果、女性たちは、これまで従事してきた家事労働や家畜の世話等の労働に加え、新たな生産労働を担うこととなり、男性よりもはるかに長い労働時間を強いられるようになったからです。この反省を受けて、その後、ジェンダー不平等はジェンダー間の権力構造に裏打ちされており、女性だけを対象に能力向上を図っても、男女の関係性は根本的には変化しないという認識が生まれました。この認識を反映させたのが「ジェンダーと開発 (Gender and Development: GAD)」というアプローチで、男女の社会関係の変革をめざしています。1990年代後半移行は、ジェンダー平等への視点があらゆる開発プログラムの中に統合されることとなり、すべての開発課題におい

てジェンダー配慮が求められるよう、「ジェンダー平等の主流化 (Mainstreaming Gender Equality: MGE)」が強まりました。

理念の問題はさておき、現実には「ジェンダーと開発 GAD」を標榜する開発プログラムにおいても、「ジェンダー」という言葉はしばしば「女性」に置き換えて理解されています。また、女性が頑張れるように能力向上をはかる一方で、ジェンダー関係を構成するもう片方の「男性性 (Masculinity)」については、不問に付されることが常です。こうした文脈の中でHeforSheキャンペーンについて考えてみると、このキャンペーンもまた、女性の頑張りを男性が支えてあげるためのキャンペーンだと誤解されるかもしれません。女性たちが今よりも頑張れる職場環境を整え、男性がそれを暖かくサポートしてあげれば、女性の地位は自然に向上し、いつの間にかジェンダー平等が実現するというのは幻想に過ぎません。ジェンダー不平等は、社会における性別役割分業に基づいて再生産されるものだからです。

国際開発研究科は、名古屋大学における部局の中で女性教員比率が高く、女性の研究科長をもつ唯一の部局です。名古屋大学の男女共同参画への取組みを体現する重要な部局であることは間違いありませんが、男性教員と女性教員の比率は、まだ社会における男女の構成比を反映していません。また、構成員である男性教員と女性教員とを比較した場合に、今の職業や役職が (個人による違いはあるにしても) 同じ人生の選択肢を与えられた中での結果を反映しているようには思えません。名古屋大学におけるHeforSheキャンペーン事業の成功に貢献し、世界中から集まる学生たちにジェンダーを含む「多様性」を尊重した教育環境を提供するために、社会におけるジェンダー平等の実現に向けて、たゆまぬ努力を続けてまいります。



TOPICS

アジアサテライトキャンパスの開設と 「アジア諸国の国家中枢人材養成プログラム」

アジアサテライトキャンパス学院 特任講師 井戸 綾子

2014年8月、名古屋大学は、東山キャンパスにアジアサテライトキャンパス学院を設置しました。同年10月には、日本の大学では初めての試みとして、カンボジア(プノンペン)、ベトナム(ハノイ)、モンゴル(ウランバートル)の3カ国に「サテライトキャンパス」を開設し、各国のサテライトキャンパスと本邦キャンパスが連携を取りながら、対面とオンラインという2つの指導方法を組み合わせるハイブリッド型の教育プログラム「アジア諸国の国家中枢人材養成プログラム」を開講しました。今後、ウズベキスタン、ラオス、フィリピン、インドネシア、ミャンマーなどの諸国にも順次サテライトキャンパスを開設できるよう準備をすすめています。

名古屋大学は、これまで、アジア地域で、経済・社会開発、法整備支援、医療行政、農村開発、環境政策などの分野で修士の学位を取得させることにより、各国の副大臣、局長クラスの政府等機関の幹部候補者の育成に貢献してきました。彼ら/彼女らの多くは、博士号の取得を希望しているものの、途上国の行政官等を対象にした学位取得型のプログラムの多くが修士レベルのものであり、また、長期にわたって職場を離れることができないなどの理由から、学位取得の機会が少ない状況におかれてきました。そこで、名古屋大学がアジア地域においてこれまで蓄積してきた実績や経験、人的ネットワークを活かし、長期間職場を離れることなく博士の学位を取得したいというニーズに応えるよう構築されたのが本プログラムです。

本プログラムは、各自の専門分野における高い研究能力を獲得させるだけでなく、実務能力・スキル向上も図ることにより、アジア諸国の中枢を担う優秀な人材を育成することを目的としており、近未来には、50名規模の大臣・副大臣級の人材を育成し、名古屋大学をハブとしてアジアにアカデミックネットワークを構築していこうとするものです。

現在、国際開発研究科、法学研究科、医学研究科、生命農学研究科、環境学研究科の各研究科が、本プログラムを博士後期課程プログラムとして提供しています。指導教員の現地派遣による指導や学生の本邦キャンパスでの短期スクーリング、TV会議システム・スカイプ・メールなどのICTを活用した遠隔指導、さらには、サテライトキャンパスで指導を行うために本学の特任教員として現地の大学教員を採用したり、本邦キャンパスの各研究科に特任教員を配置するなどして、きめ細かい研究指導体制を整備しています。

国際開発研究科が本プログラムを通して受け入れるのは、カンボジアやフィリピン、インドネシアからの学生です。本プログラムの第一期生として、昨年10月に国際開発研究科に入学されたのは、カンボジア国環境省の幹部職にある女性です。既に、現地で数回にわたり、指導教員から論文指導を受けているほか、時差や学生が現職の多忙な国家公務員であることを考慮し、平日夕方からTV会議システムを活用した論文指導も定期的に行われています。

本年6月に3週間にわたって行われた本邦キャンパスでの短期スクーリング期間中には、博士論文の中間報告会に加え、講義の受講や博士論文の集中指導、そして博士論文のテーマに関して日本の学校現場から知見を得るため、名古屋大学教育学部附属中・高等学校を訪問しました。



▲カンボジアサテライトキャンパス開校式・入学式の様子



▲TV会議システムを利用した論文指導の様子

海外実地研修 2014

カンボジアでの海外実地研修

海外実地研修実施委員会 委員長 日下 渉

国際開発研究科は、大学院生が途上国における開発の現場を実践的に学ぶ機会として、海外実地研修(Overseas Field Work: OFW)を、1992年から20年以上にわたって実施しています。2014年度は、カウンターパートとして王立プノンペン大学の協力を得て、カンボジアのコンプンスプー州で実地研修を行いました。これはカンボジアにおける7度目のOFWです。コンプンスプー州は、首都のプノンペンからバスで3時間ほど移動したところであり、農業を地域経済の基盤とする地域です。

参加した25名の学生は、①マイクロファイナンス、②ローカル・ガバナンス、③言語教育、③コミュニティ開発という4つのワーキング・グループを作り、自発的な議論に基づいて、調査の課題や方法を決めていきました。また、事前講義を通じて、カンボジアの地域事情や現地における開発の課題に関する理解を深めました。そして、8月17日から31日にかけて2週間、現地で研修を行いました。学生たちは、朝早くから現地の役人や村人を訪れてはインタビューを行い、そこで得たデータをどのように整理して議論を立てるのかホテルで夜遅くまで議論を重ねました。

現地調査を終えた8月27日には、現地政府と協力者に感謝の意を伝えると同時に、調査結果について討議するため、現地政

府の庁舎で調査結果発表会を行いました。また、首都のプノンペンに戻って8月29日には、王立プノンペン大学で、王立プノンペン大学、王立法経大学、梨花女子大学校と合同で英語による研究報告会を行いました。同報告会において、OFW参加者は、様々な大学に所属する大学院生と交流しながら、カンボジアの今日的な開発課題に関して積極的な議論を重ね、理解をいっそう深めました。

今回のOFWでも、王立プノンペン大学の教員と大学院生からは、事前の調整、通訳、研究面での助言など、多岐にわたって多大なるご協力を頂きました。OFWという目的のために2週間にわたって寝食を共にすることで、深い信頼関係を築けたと思います。また、コンプンスプー州の役人や村人の方々も学生や教員を快く迎え入れて、貴重なお話を聞かせてくださりました。改めて感謝の意を申し上げます。改めて感謝の意を申し上げます。



▲農村で村人にインタビューする大学院生

国内実地研修 2014

大台町での国内実地研修

国内実地研修実施委員会 委員長 島田 弦

2014年度国際開発研究科国内実地研修は、9月24日～26日に三重県多気郡大台町にて行いました。研修の目的は、日本での地域開発の経験と現状を、現場に赴いて調査することにより、国際開発協力への新たな視点を獲得することです。2013年度までの数年間は、浜松市や瀬戸市で実習を行い、大都市圏周辺における地域開発や地域共同体形成について学びました。他方、大台町は、人口減少が進む三重県南勢地方に位置し、人口減少の中で地域の社会、経済、教育を維持していくという課題に直面しています。

大台町は宮川の清流沿いの町で、日本三大溪谷に数えられ大台ヶ原につながる大杉谷溪谷や豊かな森林、町内に点在する茶畑など美しい景観と歴史を持っています。しかし、木材価格下落と労働者不足により主産業のスギ林は放置され、自然災害の原因ともなっています。茶産業も、緑茶消費の減少と茶価格の低迷、後継者不足により苦戦しています。また、少子化により学校の統廃合が進んでいること、さらに高校以上の進路の選択肢が少ないことも人口流出につながっています。

町は、第三セクター方式による雇用創出、町内への移住促進に取り組み、そのために町内外を問わず若手人材の登用に努め

ています。環境保全や観光・農業振興への市民社会の参加も注目すべきことです。これらの問題と対策は、大台町に限ったことではありませんが、ここを通じて日本の遠隔地域が抱える問題の多くを知ることができます。

研修は、大台町役場からの多大なご協力により行うことができました。特に、町役場企画課・西出覚係長は多忙な本務に加えて、研修に必要な訪問先調整などに多くの時間を割いていただいただけでなく、名古屋大学まで町の説明のために来ていただきました。大台町の小中学校、大杉谷自然学校、森林組合、森林保全に取り組むNGOである「森撰組」「フォレストファイターズ」、道の駅、町内の茶農家の方々、農協にもご協力いただきました。また、私どもを町役場にご紹介いただいた町議会議員・小野氏および名古屋大学研究員・中世古氏の協力も研修実現に不可欠なものでした。最後になりましたが、皆様へお礼申し上げます。



▲商工会・農協の方から話を聞く大学院生

2014年度 学位授与状況

2014年度に国際開発研究科(GSID)より授与された学位の取得者数は以下のとおりです。

後期課程博士学位取得者は14名です。取得者を専攻別に見ると、国際開発専攻(DID)7名、国際協力専攻(DICOS)4名、国際コミュニケーション専攻(DICOM)3名です。

前期課程修士学位取得者は68名です。取得者を専攻別に見ると、国際開発専攻(DID)28名、国際協力専攻(DICOS)20名、国際コミュニケーション専攻(DICOM)20名です。



▲博士学位取得者記念撮影



▲修士学位取得者記念撮影(DID)



▲修士学位取得者記念撮影(DICOS)



▲修士学位取得者記念撮影(DICOM)

入学状況

2015年度 4月 入学状況

1. 博士課程前期課程

専攻	志願者数	合格者数	入学者数
国際開発	28 22 49	18 14 26	15 14 22
国際協力	13 17 33	12 15 28	11 15 24
国際コミュニケーション	42 37 60	18 13 24	18 12 23
合計	83 76 142	48 42 78	44 41 69

※注…赤は女性、青は留学生で内数

2. 博士課程後期課程

専攻	志願者数	合格者数	入学者数
国際開発	4 7 12	3 5 8	3 5 8 5
国際協力	4 8 9	3 7 8	2 6 7 4
国際コミュニケーション	3 5 6	3 5 5	3 5 5 4
合計	11 20 27	9 17 21	8 16 20 13

※注…赤は女性、青は留学生、緑は内部進学者で内数

2014年度 10月 入学状況

1. 博士課程前期課程

専攻	志願者数	合格者数	入学者数
国際開発	1 3 3	1 3 3	1 3 3
合計	1 3 3	1 3 3	1 3 3

※注…赤は女性、青は留学生で内数

2. 博士課程後期課程

専攻	志願者数	合格者数	入学者数
国際開発	4 3 5	2 2 3	2 2 3 0
国際協力	1 1 4	1 1 3	1 1 3 0
国際コミュニケーション	2 0 3	0 0 1	0 0 1 0
合計	7 4 12	3 3 7	3 3 7 0

※注…赤は女性、青は留学生、緑は内部進学者で内数

学位取得者のことば

DID Ph.D. (International Development) Christian OTCHIA

Obtaining a PhD degree in three years is just as challenging as it is exciting and rewarding. When I joined the PhD program in GSID, I received the encouragement to be protracted, to define a clear and manageable research proposal, and never work outside my comfort zone. But to me, entering the PhD program was as achieving a childhood dream. Therefore, I liked to put pressure on my shoulder, which helped me to move faster: I created a trustable relation with my supervisor to work on my pace and receive his advice whenever it was possible; I presented my research progress regularly in the seminar at GSID – where I always reserve the first and last presentation slots of the semester – and in academic conference; then, I choose a “growing” and credible journal to submit my drafts for consideration. Pretty much classic but I’ll probably say it’s all about strategy and time management.



国際協力専攻 博士(国際開発学) 真崎 翔

後期課程での3年間で多くの方々に支えて頂きました。全ての方々へ謝辞を述べると、ニューズレターが辞書の厚みになってしまいます。そのため、ここでは2名の方へ感謝を述べさせていただきます。

1人目は、副指導教員の西川由紀子先生です。西川先生には、出願前から懇切丁寧にご指導頂きました。GSIDの一員となれたのは、西川先生のお陰です。2人目は、指導教員の山形英郎先生です。私は名古屋大学学術奨励賞を受賞致しました。しかし、これは山形先生の卓越した指導力に対して与えられた栄誉なのです。心から御礼申し上げます。

現在、私は非常勤講師をしております。先生方のような立派な研究者／教育者となれるよう、今後も研鑽を積んで参ります。



国際コミュニケーション専攻 博士(学術) 劉 善鈺

私は、学部を卒業後教職につき、より良い教師になるために日本の大学院への留学を決意しました。留学期間をこなしながらの論文執筆は簡単ではなく、博士号をあきらめかけたこともありましたが、GSIDの諸先生方に温かいご指導ご鞭撻をいただき、最後まで頑張ることが出来ました。また、ここには様々な国からの留学生がいて、研究室の枠を超えて気さくに話し合える環境があり、研究を続けるいい刺激になりました。今後大学院進学を目指す皆さんには、行き詰ることがあるかもしれませんが、研究をやり遂げる気持ちを持って臨んでいただければと思います。最後に、指導教員である藤村逸子先生、木下徹先生、加藤高志先生に心より感謝申し上げます。



GSID教員の新刊紹介

『英語の文字・綴り・発音のしくみ』

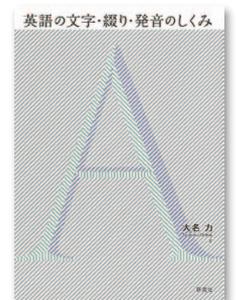
研究社 (2014年10月刊行) 大名 力(著)

本書は、アルファベットの起源と発達、現代英語の綴りの仕組みとその歴史的な成立の過程を扱うもので、音声学、文字論、英語史などの各分野で扱われてきた内容を相互に関連付けながら、英語の書記体系について包括的かつ原理的な記述・説明を試みた。こう書くと如何にも専門的で難しい本ようですが、次のような、英語を学んだ人なら誰でも知っている“当たり前”のこの理由がわかる内容になっています。

- name のように読まない e を語末に付けるのはなぜか
- sitting と綴るのにどうして visit は visitting と綴らないのか
- A の名称が“ア”でなく“エー”なのはなぜか

- 冠詞の発音が母音と子音の前で違うのはなぜか
- leg は legg としないのに、egg では g を重ねるのはなぜか

これらの問いに答えられなくても英語は使えますが、普段意識せずに使っている文字、書記体系の裏で働いている原理を知るとは楽しいことです。順に読み進めれば言語学の知識はなくても理解できる構成になっていますので、英語の研究・教育関係者に限らず、広く英語の文字・綴りに関心のある方にお読みいただければ幸いです。



『Young, Well-Educated, and Adaptable Chilean Exiles in Ontario and Quebec, 1973-2010』

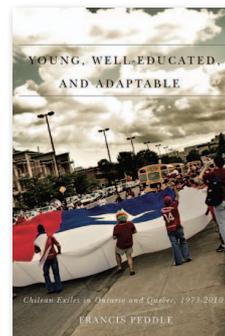
Published by University of Manitoba Press, September 2014 Francis PEDDIE(著)

Between 1973 and 1978, six thousand Chilean leftists came to Canada as exiles from the Pinochet coup d'état. They left Chile for different reasons and arrived in Canada in a variety of ways, but they shared one trait: they had not wanted to leave Chile, and were only grudgingly admitted to Canada. Once resettled, with many in Ontario and Quebec, these political exiles had to find ways of coping with an abrupt and violent separation from their homeland that had deep material and emotional repercussions.

In 1990, the military regime in Chile ceded power to a civilian government, and the main reason for staying in exile disappeared. Yet most of the exiles stayed. Canada

was no longer seen as a place of transit, a backdrop to be endured until they could reclaim their places in Chile. For the political exiles, it had become home.

In *Young, Well-Educated, and Adaptable*, Francis Peddie documents the experiences of Chilean-Canadians. He also considers how the admission of people from the wrong side of the Cold War ideological divide had a lasting effect on Canadian immigration and refugee policy, establishing a precedent for the admission of political exiles over the decades that followed.



公開講座

「観光振興と地域開発(理論と国内外の事例)」

教授 梅村 哲夫

この公開講座は、国内外で地域振興策や外貨獲得などの方策として注目されている観光振興について3回シリーズで行った。2014年10月10日の第1回目は、観光に関する用語や定義、世界観光の動向、観光振興が国や地域経済に与える正負の影響など理論中心に解説した。観光振興は良い点が多いものの、持続可能な開発を考えたとき、観光振興が自然環境や地域社会に与える影響を考慮する必要があることを指摘した。

10月17日の第2回目は、本研究科の藤川教授が経済学から見た観光振興について解説した。観光客の支出は観光地では輸出と同様に計上され、その経済波及効果を産業連関分析で推計する方法を、実際例を紹介しながら説明した。また、観光客の支出を通じて、観光地の経済価値を推計しようとする顕示選好法(旅行費用法)の考え方についても実際例を紹介しながら説明した。

10月24日の最終回は事例紹介をした。まず身近な例として沖縄県の観光振興を解説した。次にカンボジアのアンコールワット、フィジー、パラオやグアムの事例を紹介した。これらの国は国際観光取

入に強く依存しているが、同時に持続可能な観光についても注意を払っている。カンボジアの場合、組織横断的なアプサラという政府組織が地域住民の生活を守りつつ注意深い観光開発を行っている。フィジーは外資導入を一元化シグナム同様、外資依存型観光開発を実施している。他方、パラオは観光資源を保全するために入域税等を観光客に課し、それを原資に自然環境保護を行っている。

今回の公開講座では、諸外国が取り組んでいる観光振興と自然環境・地域社会とのバランスの工夫を紹介したが、これら事例を参考に中部地方における様々なレベルでの観光振興のヒントになれば、たいへんありがたいと考えている。

日程	講師	所属
1 10月10日(金)	梅村 哲夫	名古屋大学国際開発研究科
2 10月17日(金)	藤川 孝史	名古屋大学国際開発研究科
3 10月24日(金)	梅村 哲夫	名古屋大学国際開発研究科

「英語の書記体系—文字と綴りについて—」

教授 大名 力

2014年8月16日(土)~18日(月)、全18時間の集中講義形式で、「英語の書記体系—文字と綴りについて—」という題目で公開講座を行った。内容は大名と成田克史教授それぞれが国際開発研究科で教えている講義の一部を合わせたもので、演習も取り入れながら、以下のことについて3日にわたり講義した。

- I. 英語の音声: 調音音声学, 緊張母音と弛緩母音, 子音の硬音と軟音
- II. 英語の発音と綴り字: 英語の文字, 各文字の読み方, 接辞の付け方
- III. 分綴法: 分綴について, 分綴の規則, 規則間の優先順位
- IV. 文字の種類と発達: 文字の種類・系統・分布, 文字の構成・用法
- V. ローマ字の起源と発達: アルファベットの基本的特徴, アル

ファベットの発達, 手書き書体の発達, 印刷術の発明・発達, 英語におけるローマ字と綴り

VI. 英語の歴史的な音変化と正書法: 英語史の区分, 各時代の文字と綴り, 歴史的な音変化

毎日90分の講義が4回とハードなスケジュールであったが、受講生は熱心に講義に耳を傾け、また、休憩時には情報交換を行う光景も見られた。2012年に同じ講座名で開講した時には受講者の多くは中高大の英語教員だったが、今回は英語教員は多かったものの、英語の書記体系に関心を持つ様々な方が参加され、アンケートの結果も好評であった。

新スタッフ紹介

国際開発専攻

准教授 上田 晶子

2014年10月に着任いたしました。学際的な開発学という分野で、主に人類学や社会学に軸足を置いた研究をしています。現在の研究テーマは、「フード・セキュリティ」と「開発の新しいコンセプト」。両方とも、ブータンをフィールドにしています。フード・セキュリティの研究では、ブータンの農村部でフィールド・ワークをしています。棚田が広がる美しい風景や、冬にチベットから渡ってくるオグロ鶴の優雅な姿を横目で見ながら、決して楽ではない農村の生活を直視し、農村の人びとが彼らの「よい生活」に少しでも近づくために、研究者として何ができるかをいつも考えています。誰かの役に立てる研究と教育をいつも目指していると思います。



国際協力専攻

准教授 岡田 勇

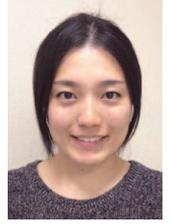
2014年11月から国際協力専攻に着任しました。専門は比較政治学で、主にラテンアメリカを対象としています。他地域にも関心を持って授業などで取り入れていると思っています。大学院では南米のアンデスやアマゾンの先住民を扱い、環境問題や先住民の政治参加を勉強しましたが、その後ボリビアに長期滞在をしてからは、天然資源が豊かな国ならではの特異な現象にも関心を持つようになりました。そうした中で、同じ事象に異なった側面からアプローチすることの意味を考えるようになってきました。GSIDでは、私が経験してきたよりもはるかに多様性をもった人々が膝を突き合わせている印象ですが、この恵まれた環境を活かしていければと思っています。



Campus ASEAN プログラム担当

特任助教 島津 侑希

2015年3月より「大学の世界展開力強化事業(通称:Campus ASEAN)」の特任助教として着任いたしました。エチオピアの農業普及員育成課程におけるジェンダー教育、およびアフリカにおける産業人材育成について研究をしています。



Campus ASEANが目標とする、ASEAN地域と日本双方の経済・法・政治・社会・文化に対する共通理解をもった次世代国際協力リーダー養成に貢献できるよう、精一杯務めて参りますので、どうぞよろしくお願いたします。GSIDの博士後期課程在学中にエチオピアのアディスアベバ大学に留学していた経験がありますので、Campus ASEANを利用した海外留学をお考えの学生の皆さんは、現地大学での生活や留学期間中の現地調査など、ぜひお気軽にご相談ください。

客員研究員の紹介

国内客員研究員

H26 西川 芳昭(龍谷大学経済学部・教授)

研究課題:地域開発における地方自治体の役割
期 間:平成26年7月~平成26年9月

真山 全(大阪大学大学院国際公共政策研究科・教授)

研究課題:国際刑事裁判所規程改正による
侵略犯罪処罰規定の導入について
期 間:平成27年1月~平成27年3月

小島ますみ(岐阜市立女子短期大学英語英文学科・専任講師)

研究課題:ライティング評価におけるテキスト特性の影響
:メタ分析による研究成果の統合
期 間:平成26年10月~平成26年12月

伊藤 怜(広島大学大学院教育学研究科・ポスドク研究員)

研究課題:日本語否定極性疑問文の意味機能と音調的特徴
期 間:平成27年1月~平成27年3月

斉藤 泰雄(国立教育政策研究所・名誉所員・フェロー)

研究課題:日本教育史の開発学的分析
期 間:平成26年11月~平成27年1月

出町 一恵(神戸大学大学院国際協力研究科・助教)

研究課題:アフリカ天然資源輸出のマクロ経済
期 間:平成26年12月~平成27年2月

中和 渚(東京未来大学こども心理学部・専任講師)

研究課題:開発途上国(ザンビア共和国、ネパール)の数学教育のカリキュラム開発
期 間:平成27年1月~平成27年3月

H27 Jonna P. ESTUDILLO(政策研究大学院大学・教授)

研究課題:“フィリピンにおける緑の革命と食料安全保障”について
期 間:平成27年4月~平成27年6月

長濱 博文(目白大学人間学部子供学科・准教授)

研究課題:フィリピンにおける比較教育
期 間:平成27年4月~平成27年6月

東條 吉純(立教大学法学部・教授)

研究課題:国有企業に対する国際経済法上の規律
期 間:平成27年4月~平成27年6月

岡田 憲夫(関西学院大学総合政策学部・教授 災害復興制度研究所長)

研究課題:安全・安心まちづくりと災害リスクガバナンス
期 間:平成27年7月~平成27年9月

沢畑 亨(水俣市久木野ふるさとセンター 愛礼館・館長)

研究課題:わが国における草の根レベルの実践的農村地域振興
期 間:平成27年5月~平成27年7月



外国人客員研究員

H26 Herlambang Perdana Wiratraman

(インドネシア国立エルランガ大学・講師)

研究課題: スハルト後のインドネシアにおける
メディアの自由に関する法社会学研究
期 間: 平成27年1月6日～平成27年3月31日

Kenneth King (エジンバラ大学・名誉教授)

研究課題: アフリカとアジアとの間の高等教育協力
期 間: 平成27年12月1日～平成27年3月31日

陳 相州 (東呉大学外国語文学部日本語学科・准教授)

研究課題: 音声刺激提示による日本語単語親密度データベースの構築
期 間: 平成27年1月20日～平成27年2月28日

H27 Aser Javier (フィリピン大学ロスバニョス校公共政策学部・准教授)

研究課題: フィリピンの変容するコミュニティにおける
ガバナンスと開発について
期 間: 平成27年4月1日～平成27年7月31日

陳 愛国 (上海交通大学人文学院・講師)

研究課題: 漁撈民俗文化の日中比較研究
期 間: 平成27年4月1日～平成27年6月30日

Chalaiporn Amonvatana (チュラロンコン大学経済学部・准教授)

研究課題: 新時代のアセアン地域連結性と日本の役割
期 間: 平成27年4月13日～平成27年5月17日

Samart Chiasakul (チュラロンコン大学経済学部・准教授)

研究課題: タイの特別経済特区政策と地域連結性の振興
期 間: 平成27年5月25日～平成27年6月30日

Taeyoung Park (漢陽大学ビジネススクール・准教授)

研究課題: アジアにおけるプロフェッショナルユーザー起業家の
起業・成功・サバイバル要因
期 間: 平成27年7月1日～平成27年8月17日

Joe Devine (バース大学社会・政策科学部・上級講師)

研究課題: 人間の福祉・不平等・貧困
期 間: 平成27年7月13日～平成27年9月11日

Nguyen Tien Dung (ベトナム国立大学ハノイ校国際経済学科・講師)

研究課題: ASEAN+1自由貿易協定からRCEPへの移行
: ベトナムにおける機会、チャレンジ、政策的意義
期 間: 平成27年8月1日～平成27年9月30日

Marcus Bingenheimer (米国テンプル大学教養学部宗教学科・助教)

研究課題: 19世紀普陀山の外国人: 帝国主義時代における中国仏教聖地
期 間: 平成27年10月1日～平成27年12月31日

Salvador Peralta Catelo (フィリピン大学ロスバニョス校・教授)

研究課題: フィリピンにおける小規模サトウキビ農家の集団経営: 農地改革の視点から
期 間: 平成27年10月1日～平成27年12月15日

Chuan Yean Soon (マレーシアサインズ大学政治学部・上級講師)

研究課題: フィリピンにおける農村変化の政治―農民層の強靱性と変容に関する研究
期 間: 平成27年10月7日～平成28年1月7日

スタッフの人事異動 (平成26年6月～平成27年5月)

教員

- 平成26年7月1日 着任
特任助教 神田すみれ
- 平成26年10月1日 着任
国際開発専攻 准教授 上田 晶子
(大阪大学グローバルコラボレーションセンター・特任准教授から)
- 平成26年11月1日 着任
国際協力専攻 准教授 岡田 勇
- 平成27年1月10日 退職
特任助教 神田すみれ
- 平成27年3月1日 着任
特任助教 島津 侑希
- 平成27年3月31日 退職
特任教授 西村 眞
国際協力専攻 助教 笠 浩一郎 (三重短期大学生生活科学科・准教授へ)

事務

- 平成27年4月1日 転出
経理G 石原 英紀 (医学部・医学系研究科総務課へ)
図書G 菊池有里子 (文系総務課図書G(教育)へ)
- 平成27年4月1日 転入
経理G 宮崎 禎仁 (農学部・生命農学研究科研究支援係から)
図書G 浅見沙矢香 (文系総務課図書G(教育)から)

協力教員の交代

- 比較国際法政システム講座
旧: 水島 朋則 (大学院法学研究科)
新: 三浦 聡 (同上)
- 旧: 田村 哲樹 (大学院法学研究科)
新: 加藤 哲理 (同上)
- 国際文化協力講座
旧: 大室 剛志 (大学院法学研究科)
新: 松澤 和宏 (同上)

Information
お知らせ

名古屋大学大学院国際開発研究科 広報委員会

オープンキャンパス 2015 に関するお知らせ

下記の要領で「オープンキャンパス 2015」を開催します。皆様のご来場をお待ちしております。

- 日時** 平成27年7月11日(土) **会場** 名古屋大学大学院 国際開発研究科棟 (地下鉄名城線「名古屋大学」下車)
(事前予約不要) 地図はホームページを参照ください。
<http://www.gsid.nagoya-u.ac.jp/global/general/map.html>

内容 プログラム

- (1) 留学生相談 11:00～14:00
- (2) 施設見学
 - 図書室 11:00-13:00
 - 言語情報処理室(コンピュータールーム) 11:00～12:30
- (3) 導入部 研究科紹介ビデオ上映 13:00～13:15
- (4) 院生によるGSID紹介 13:15～13:50
院生による特色ある社会貢献活動、インターシップ体験談を含む
- (5) 全体説明会 14:00～14:45
 - 専攻及び教育プログラムの特徴
 - GSIDの入学生の構成、就職先
 - 入学試験の説明 ● 公開講座の案内
 - リーディング大学院等の案内 など
- (6) 専攻別説明会と個別相談 15:00～16:00
 - 各専攻別説明会(教育プログラムを中心に)
 - 個別相談(教員と院生が対応)
- (7) 展示 11:00～16:00
海外実地研修、国内実地研修、研究科出版物 など

お問い合わせ先/opencampus@gsid.nagoya-u.a.jp